パラスポーツへの意識に影響を及ぼす要因に関する研究

中村真博

1．問題の所在

東京2020パラリンピック夏季競技大会の開催決定を契機に，日本国内においては「一人ひとりの違いを認め，誰もが活躍できる」ダイバーシティ＆インクルージョンな社会（D & I社会）を実現するために，パラスポーツを通じた意識変革，行動変容を促進するための様々な取り組みが行われている[1,2]。

そうしたなか，藤田（2016）はインターネット調査を通じ「障害者スポーツの体験や直接観戦，メディア等を通しての間接観戦，そして身近な障害者の存在がパラリンピック関連の言葉の認知度や障害者や障害者スポーツに対する意識に明らかにポジティブな影響を与えていること（中略），障害者や障害者スポーツに対する意識には性別や年齢も影響していること」を明らかにしている[3]。

また，その他の先行研究においても，パラスポーツへの意識に影響を与える要因として，以下が挙げられている。

中村（2020）は，パラスポーツへの意識や障がい者との共生意識に着目し，パラスポーツ体験の有無による回答結果の差異を検証したところ，パラスポーツ体験はパラスポーツへの意識に一定程度ポジティブな影響を与えることを明らかにしている[4]。

また藤田（2013）はパラスポーツへの意識について，スポーツ指導者資格を有する指導者を対象に，年齢や性別，指導経験年数，障がい者への指導経験の有無などに着目したアンケート調査を実施した。その結果，年齢や障がい者への指導経験の有無によりパラスポーツに対する理解度に差異がみられることを明らかにしている[5]。

その他にも，パラスポーツに対する意識や態度に影響を与える要因として，体験者の年齢に着目した研究[6]，体験の実施形態（障がい者の参加の有無，授業形態など）に着目した研究[7,8]，体験実施前後で意識の比較を行った研究[9,10,11,12]などがみられる。

以上のように，様々な要因がパラスポーツに対する意識や態度に影響を与えることが明らかになっている。しかし，要因同士の関連性については明らかにされていないため，

多くの先行研究において多角的な視点から要因を検討することの必要性が指摘されている。

そこで本稿では，年齢や性別といった基本的属性や障がい者との関わり，パラスポーツに関連する経験が，パラスポーツへの意識に対してどのような影響を与えているのかについて明らかにすることを目的とする（図１）。

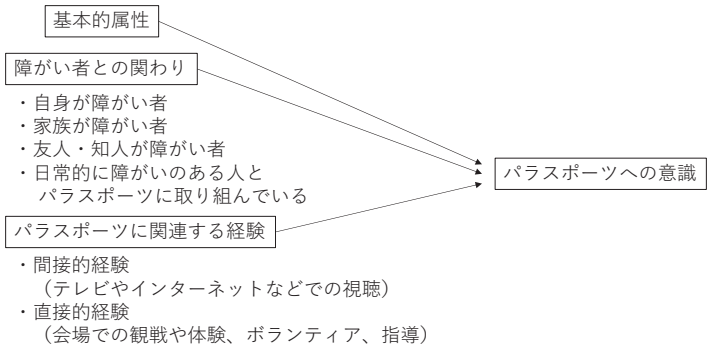

図１　検証命題：パラスポーツへの意識の規定要因

検証命題１　性別や年齢という基本的属性はパラスポーツへの意識にどのような影響を与えるのか。

検証命題２　障がい者との関わりはパラスポーツへの意識にどのような影響を与えるのか。

検証命題３　パラスポーツに関連する経験はパラスポーツへの意識にどのような影響を与えるのか。

２．方法

本稿では，以上の検証命題を解決するために，「基本的属性」「障がい者との関わり」「パラスポーツに関連する経験」を独立変数，「パラスポーツへの意識」を従属変数とする重回帰分析を行う。分析に用いるデータの概要および変数の準備は以下の通りである。

（１）調査概要

本稿において用いたデータは，パラリンピック研究会が2019年９月27日から29日に実施した「スポーツに関するアンケート」調査の結果である。本調査は，株式会社マクロミル（調査会社）のモニタ会員10,506名を対象にインターネット調査を実施した（注１）。なお，対象者は12歳以上の男女であり，回答者のうち6.3％が自分自身に障がいがある

と回答している（注２）。

（２）質問項目

①　独立変数

本稿で独立変数として用いたのは，本調査において「基本的属性（年齢，性別）」「障がい者との関わり」「パラスポーツに関連する経験」について尋ねた質問項目である。「基本的属性（年齢，性別）」を除く質問項目を以下に示す。

・障がい者との関わり

本調査において障がい者との関わりについて尋ねた問７の質問項目・結果を用い，分析を行う。

なお，本多（2019）はパラスポーツ接触（する，観る，支える（育てる））につながる要因として身近な障がい者の存在に着目し，「自身・家族」「親戚・友人のみ」「いない」という３群に分け分析を行った。その結果，障がい者との関わりをより細分化した分析の必要性が明らかになったことから[13]，本稿では本多の分類を参考に「自身」と「家族」をそれぞれ独立させるとともに，障がいに関する当事者性が高いと考えられる「日常的に障がいのある人とパラスポーツに取り組んでいる人」を分析項目に加える。

問７：あなたご自身，またはあなたの身近に障がいのある人はいますか。または以下の体験をしたことがありますか。（ここでの「障がい」は，身体障がい，精神障がい，知的・発達障がいを指します。）

１．自分自身に障がいがある
２．家族に障がいのある人がいる
３．友人・知人に障がいのある人がいる
７．日常的に障がいのある人とパラスポーツに取り組んでいる
10．これまで，障がいのある人と関わったことはない

各質問項目に対する回答は，「１．はい」「２．いいえ」である。なお，分析の際は「０．いいえ」「１．はい」というカテゴリー変数として分析を行っている。

・パラスポーツに関連する経験

本調査におけるパラスポーツに関連する経験についての質問項目（問５）は以下の通りである。分析ではこれらの項目を因子分析（注３）にかけ，その因子を抽出した。

問５：あなたは以下のパラスポーツに関連する経験をしたことがありますか。
ある場合は回数をお答えください。（それぞれひとつ）

１．パラスポーツに関する番組（ニュース，情報番組，バラエティー番組など）の視聴
２．テレビやインターネットでのパラスポーツ観戦
３．大会会場でのパラスポーツ観戦
４．パラスポーツ体験
５．パラスポーツに関わるボランティア活動
６．パラスポーツの指導

各質問項目に対する回答は「１．経験なし」「２．１～２回」「３．３回以上」である。したがって，得点が高いほどパラスポーツに関連する経験が多いことを表す。

これらの質問項目を因子分析にかけた結果が表１である。分析の結果，二つの因子が抽出された。これら抽出された二つの因子の項目内容を勘案し，ここでは「番組の視聴」および「テレビやインターネットでの観戦」を「間接的経験」,「大会会場での観戦」「体験」「ボランティア活動」および「指導」を「直接的経験」と設定する。

表１　パラスポーツに関連する経験の因子分析結果

パラスポーツに関連する経験	間接的経験	直接的経験
番組の視聴	**.505**	.036
テレビやインターネットでの観戦	**.973**	－.020
大会会場での観戦	.088	**.597**
体験	.025	**.653**
ボランティア活動	－.024	**.781**
指導	－.053	**.615**
因子寄与	1.870	1.351
因子寄与率	31.160	22.524

※最尤法　プロマックス回転

② 従属変数

本稿で従属変数として用いたのは，本調査の「問６．パラスポーツへの意識」に関する質問項目である。

・パラスポーツへの意識

本調査におけるパラスポーツへの意識に関する質問項目（問６）は以下の通りである。

これらの質問項目を「パラスポーツへの意識尺度」として分析するにあたり，因子分析にかけ，尺度の内的整合性を検討した。

問６：あなたはパラスポーツに対してどのような考えをお持ちですか。

（それぞれひとつ）

１．パラスポーツは障がいの有無や年齢，性別などを問わず，みんなで楽しみながら行うことができる

２．パラスポーツはスポーツとして面白い

３．パラスポーツの普及は社会的課題（施設のバリアフリー化，平等・公平な社会の実現など）の解決につながる

４．パラスポーツを体験することによって，障がいのある人に対する理解が深まる

５．障がいのある人がスポーツを行うことは大変だ

６．パラスポーツには興味がない

問６に対する回答項目は，「１．そう思う」「２．どちらかといえばそう思う」「３．どちらとも言えない」「４．どちらかといえばそう思わない」「５．そう思わない」である。なお，「５．障がいのある人がスポーツを行うことは大変だ」「６．パラスポーツには興味がない」については，パラスポーツに対して否定的な意識を有していることを想定した質問項目であるため，分析に際して数値を反転させている。したがって，いずれの回答項目も合計得点が高いほどパラスポーツへの意識が肯定的であることを表す。

これらの質問項目を因子分析にかけた結果が表２である。

表２　パラスポーツへの意識の因子分析結果①

パラスポーツへの意識	
みんなで楽しみながら行うことができる	.735
スポーツとして面白い	.768
社会課題の解決につながる	.812
障がいのある人に対する理解が深まる	.792
障がいのある人がスポーツを行うことは大変だ	−.207
パラスポーツには興味がない	.458
因子寄与	2.670
因子寄与率	44.493

※最尤法

分析の結果，「障がいのある人がスポーツを行うことは大変だ」の項目のみ因子負荷量が負の値を示し，尺度の信頼性が低いと考えられる。そこで，「障がいのある人がスポーツを行うことは大変だ」の項目を除外した５項目で再度，因子分析にかけた結果が表３である。

表３　パラスポーツへの意識の因子分析結果②

パラスポーツへの意識	
みんなで楽しみながら行うことができる	.737
スポーツとして面白い	.775
社会課題の解決につながる	.808
障がいのある人に対する理解が深まる	.785
パラスポーツには興味がない	.467
因子寄与	2.631
因子寄与率	52.623

※最尤法

その場合，尺度の信頼性係数は α ＝0.830となり，信頼性の高い尺度であると考えられるが，「パラスポーツには興味がない」の因子負荷量が0.467と影響が弱いことが明らかになった。そこで，「パラスポーツには興味がない」の項目も除外した４項目で再度，因子分析にかけた結果が表４である。その場合，信頼性係数は α ＝0.858となり，表３よりもさらに信頼性の高い尺度であり，因子負荷量についても項目間で大きな差異がみられず，適切な尺度であると考えられる。

以上の検討を踏まえ，本稿で用いる従属変数のひとつである「パラスポーツへの意識」については表４に示す項目で構成する。

表４　パラスポーツへの意識の因子分析結果③
（従属変数に使用する尺度）

パラスポーツへの意識	
みんなで楽しみながら行うことができる	.734
スポーツとして面白い	.750
社会課題の解決につながる	.821
障がいのある人に対する理解が深まる	.798
因子寄与	2.412
因子寄与率	60.303

※最尤法

3．分析結果

パラスポーツへの意識を従属変数とした重回帰分析を行った結果が表４である（注４）（注５）[14]。

表５　パラスポーツへの意識を従属変数とした重回帰分析の結果

	標準化係数		
	Model 1	Model 2	Model 3
基本的属性			
性別（男性＝１）	−.192***	−.189***	−.196***
	(.077)	(.076)	(.071)
年齢	−.013	−.013	−.033***
	(.003)	(.003)	(.003)
障がい者との関わり（基準カテゴリ＝障がい者との関わりなし）			
自身（＝１）		−.035***	−.032***
		(.150)	(.139)
家族（＝１）		.028**	.019*
		(.115)	(.107)
友人・知人（＝１）		.155***	.083***
		(.090)	(.085)
日常的に障がいのある人と		.039***	.002
パラスポーツに取り組んでいる（＝１）		(.277)	(.272)
パラスポーツに関連する経験			
間接的経験			.361***
			(.028)
直接的経験			.043***
			(.051)
Adjust R^2	.039	.067	.198
F	211.640	12.673	324.772
AIC	57423.334	57112.150	55526.978
N	10506	10506	10506

* = p<.05, ** = p<.01, *** = p<.001
※括弧内は標準誤差

はじめに，自由度調整済み決定係数（Adjust R^2）は，Model 1（基本的属性のみ）で .039，Model 2（基本的属性＋障がい者との関わり）で .067，Model 3（全ての独立変数）で .198と改善されており，障がい者との関わり，およびパラスポーツに関連する経験がパラスポーツへの意識に影響を与える要因となることがわかる。なかでも，Model 1から Model 2への Adjust R^2の増加度合いよりも，Model 2から Model 3への

Adjust R^2の増加度合いの方が大きく，パラスポーツへの意識に影響を与える要因として，パラスポーツに関連する経験が相対的に大きいことが明らかになった。

次に，「パラスポーツへの意識尺度」得点に関し，基本的属性に着目すると，男性は女性よりも有意に負の効果がみられ，男性のパラスポーツへの意識は女性の意識と比較すると消極的であることが明らかになった。また，年齢に着目すると，Model 3では有意な負の効果がみられ，年齢が高い方が消極的な意識を有することが明らかになった。しかし，この結果についてModel 1，Model 2では有意な差はみられず，年齢はパラスポーツへの意識に影響を与えるが，相対的には大きくないことがわかる。

「パラスポーツへの意識尺度」得点に関し，障がい者との関わりに着目すると，「家族」「友人・知人」に障がいのある人がいる回答者および「日常的に障がいのある人とパラスポーツに取り組んでいる」回答者については，有意な正の効果がみられた。したがって，それらの人については，パラスポーツへの意識が肯定的であることがわかる。ただし，後者の「日常的に障がいのある人とパラスポーツに取り組んでいる」回答者については，Model 2では有意な正の効果がみられたものの，Model 3では有意差はみられず，パラスポーツへの肯定的な意識に与える要因として，前者の「家族」「友人・知人」に障がいのある人がいる回答者に比べ小さい。一方，「自分自身に障がいがある」回答者については，有意な負の効果がみられ，パラスポーツへの意識がやや消極的であることが明らかになった。

「パラスポーツへの意識尺度」得点に関し，パラスポーツに関連する経験に着目すると，「間接的経験」「直接的経験」のどちらも有意な正の効果がみられ，パラスポーツに関連する経験を有する人はパラスポーツへの意識が肯定的に変化することが明らかになった。なかでも，テレビやインターネット等を通じたパラスポーツとの関わりを表す「間接的経験」のある人のパラスポーツへの意識は，大幅に肯定的に変化することが明らかになった。

4．考察

以上，パラスポーツへの意識の規定要因について，基本的属性，障がい者との関わり，パラスポーツに関連する経験に着目し検証してきた。なお，Model 3の分析結果を整理したものが図２である。

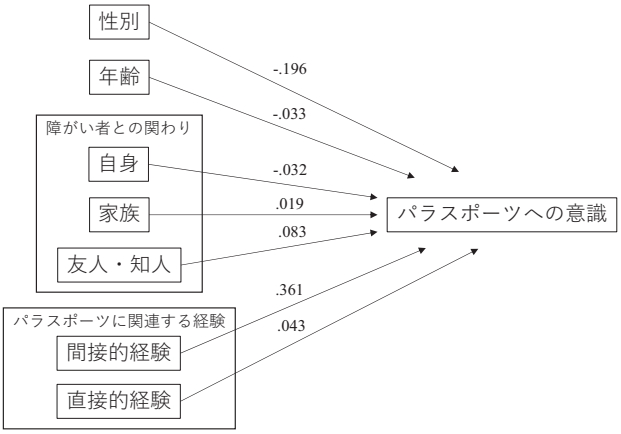

図２　パラスポーツへの意識の規定要因（標準化係数）

パラスポーツに対する肯定的な意識に影響を与える要因として，基本的属性である性別と年齢を除き大きいものから順に並べると，間接的経験，友人や知人に障がい者がいること，直接的経験，家族に障がい者がいることであった。その反面，自身が障がい者である場合，パラスポーツに対してやや消極的な意識を有していることも明らかになった。

以下では，分析結果に基づき，上述した検証命題についてより詳細に確認していく。

検証命題１　性別や年齢という基本的属性はパラスポーツへの意識にどのような影響を与えるのか。

まず，性別に着目すると，男性は女性と比べ，パラスポーツへの意識が消極的であることが示唆された。この結果について，藤田（2016）や吉岡ら（2009）による報告においても女性の方が男性よりもパラスポーツへの意識が肯定的であることが明らかにされており[15, 16]，パラスポーツへの意識には性別が影響を与え，男性と比較すると女性の方が肯定的な意識を有していることが推察される。また，性差に着目し，障がい者に対する態度について検討した豊村（2008）は「男性より女性の方が障害者に対してより好意的に評価している」と指摘している[17]。したがって，それはパラスポーツに限られることではなく，そもそも障がい者に対する男女の意識や態度の違いが影響を与えているとも考えられよう。

次に，年齢に着目すると，影響は相対的には大きくないものの，年齢が高い人程パラスポーツへの意識がやや消極的であるという結果が示された。藤田（2013，2016）によ

る報告でも同様の結果となっており[18, 19]，パラスポーツへの意識には年齢が影響を与え，年齢が高くなるにつれ，肯定的な意識が少ない傾向があると推察される。

検証命題２　障がい者との関わりはパラスポーツへの意識にどのような影響を与えるのか。

先述したように，自分自身が障がい者である場合は，パラスポーツへの意識は肯定的ではなく，むしろやや消極的であることが示唆された。そこで，障がい当事者のそうした意識の背景を考えるにあたっては次の論考が参考になる。中山（2018）は障がい者におけるパラリンピック大会の視聴態度に着目し，「『視聴非積極的』群においては（中略）『自らの置かれた環境』と選手たちの姿の間に『ギャップ』が生じており，そのことが視聴に積極的でない要因の一つとなっている」と指摘する[20]。本調査におけるパラスポーツへの意識についても同様に，パラスポーツを通じた障がい（者）に対する意識変革が標榜されるなか，自身の置かれた環境には変化が感じられず，目指されている社会と現実の社会にギャップを感じ，パラスポーツへの意識についてもやや消極的なものになっているとも考えられよう。

次に，家族や友人・知人に障がい者がいる場合は，パラスポーツへの意識がやや肯定的であることが示唆された。この結果と同様に，塩田（2015）は障がい者との接触経験を有する人はパラスポーツに対して好意的であること，また，障がい者との関わりが比較的浅く，表面的な関わりがあることが障がい者に対する抵抗感を軽減することを指摘している[21]。

以上の結果から，パラスポーツへの意識に障がい者との関わりは影響を与えるが，それにより肯定的な意識になるか消極的な意識になるかは，自身が障がい者であるかどうか，また，障がい者との関わりの深度によっても差異が生じることが推察される。

検証命題３　パラスポーツに関連する経験はパラスポーツへの意識にどのような影響を与えるのか。

パラスポーツに関連する間接的経験と直接的経験がパラスポーツへの意識に与える影響をみると，テレビやインターネットでのパラスポーツ観戦といった間接的経験を有する人も，大会会場でのパラスポーツ観戦や体験，ボランティアなどの直接的経験を有する人も双方肯定的な意識はあるものの，両者を比較すると直接的経験を有する人の意識の方がその肯定の度合いが大幅に低くなることが示唆された。

直接的経験を有する人は自身が障がい者である場合と同様に，障がい者を取り巻く現実の社会に触れている可能性が高く，目指されている社会とのギャップを感じやすいことが背景にあるとも考えられよう。すなわち，日本国内において標榜されるパラスポーツを通じた人々の意識変革・行動変容に対して，直接的経験を有する人は実体験に基づき，より冷静な評価を下していると考えられ，間接的経験を有する人と比較すると肯定的な意識がやや醸成されにくいと推察される。

一方，間接的経験を有する人が直接的経験を有する人よりもパラスポーツに対する期待を抱いている背景のひとつには，東京大会の開催決定後にパラスポーツ関連団体やメディアが積極的に発信してきた内容が主にパラスポーツに対し肯定的なものであるため，それがパラスポーツを間接的に接した人々のなかで過度な期待を抱かせている可能性もあるといえよう。

5．まとめ

本稿では，パラスポーツへの意識に影響を及ぼす要因を明らかにすることを目的とし，多変量解析を用いた分析を行った。分析に際しては，パラスポーツへの意識を従属変数，基本的属性，障がい者との関わり，パラスポーツに関連する経験を独立変数とした重回帰分析を行った。

分析結果より，テレビやインターネットでの観戦といった間接的経験があるということが，パラスポーツへの肯定的な意識に最も影響を与える要因であることがわかった。また，性別が女性であることも相対的に大きな影響を与えることが明らかになった。

一方，自分自身に障がいがある場合，パラスポーツへの意識はやや消極的になるという結果が示された。また，パラスポーツに関連する直接的経験がある場合，パラスポーツへの意識は肯定的ではあるものの，間接的経験がある場合と比較すると大きな影響を与えないことも示唆された。これらの結果については，パラスポーツに関する当事者性を有するが故にパラスポーツやその社会的影響力に対し「厳しい目」を持ち，冷静に評価している結果であるとも読み取ることができよう。特に障がい当事者がパラスポーツに対して消極的な意識を有している結果については，パラスポーツの振興，ひいては共生社会の構築を目指すための方策を検討するにあたり，重要な知見であると考えられる。

山田ら（2018）は，身体障がい者（視覚障がい，聴覚障がい，肢体不自由）が平昌2018パラリンピック冬季競技大会の放送をどのように受け止めたかについて調査し，「障害者に関する報道の仕方や伝え方が十分でないと感じた」人が３割以上いたことを

明らかにしている[22]。また同調査では，肢体不自由のある回答者より「一人一人障害の程度が違うので，障害者とひとくくりにするのはどうか」や「『障害者はスポーツをするものだ』という偏見を広く市民に植えつけて，とてもウザイ」といった声も聞かれた[23]。これらの声を踏まえると，当事者がパラリンピック放送に批判的な感想を抱く背景には，パラリンピックやパラスポーツ自体への批判というよりも，むしろそれらを通した障がい者の受け止められ方や社会における障がい（者）への無理解や無関心が背景にあるとも推察できる。

一方，本調査においては，パラスポーツに関する間接的経験が，パラスポーツへの肯定的な意識の醸成に一定程度効果があることが示唆されていることから，スポーツという親しみやすいツールが，障がい（者）に関する新たな知識を獲得したり，興味を持つきっかけとなることは間違いないだろう。自国開催であった東京大会はコロナ禍により無観客開催となったものの，NHK 以外にも民放テレビ局が初の生中継を実施し，インターネットなどでも競技の様子が生配信されていたため，全体の放送時間としては過去最長となった。それに伴い，国内ではこれまでのパラリンピック大会のなかでも最も多い間接観戦者がいたと予想される。これを一過性で終わらせることなく，東京大会以降も引き続きさまざまな場面でパラスポーツを見聞き，体験できる機会を担保することにより，パラスポーツの認知度向上に寄与するのはもちろん，障がい（者）への理解や関心を喚起し，障がい者を取り巻く環境にまで至る深い議論が行われるような土壌が形成されていくのではないだろうか。

注

（1）調査の詳細（調査目的や質問項目，単純集計結果等）については，パラリンピック研究会ホームページ「パラスポーツと共生社会　第 1 回調査報告」（http://para.tokyo/2020/09/post-34.html）および中村（2020）を参照されたい。

（2）内閣府の令和元年版障害者白書は，国民のおよそ7.6％が何らかの障がいを有していると推計している。

（3）因子分析とは，複数の変数の背後にある要因・共通因子を明らかにするための分析である。因子分析結果（表 1 ～ 4）内の数字は「因子負荷量」を示し，得られた共通因子が分析に用いた変数（観測変数）に与える影響の強さを表す。－ 1 以上 1 以下の値をとり，絶対値が大きいほど共通因子と観測変数の間に強い相関があることを示す。

（4）本稿の分析においては，統計分析ソフト HAD　version17_105（清水，2016）を用いている。

（５）重回帰分析とは，分析対象の従属変数（本項では「パラスポーツへの意識」）を他の複数の独立変数（本項では「基本的属性」「障がい者との関わり」「パラスポーツに関連する経験」）を用い説明するための分析である。本稿では階層的重回帰分析を行い「パラスポーツへの意識」に対する説明力を検討している。Model 1では「基本的属性」の説明力を検討し，Model 2ではModel 1に「障がい者との関わり」という独立変数を加えることで説明力の増加度合いを検討している。Model 3では，それに加え「パラスポーツに関連する経験」という独立変数を加えることで説明力の増加度合いを検討している。重回帰分析結果（表５）内の「標準化係数」は，重回帰式における各変数の重要性を表す指標であり，標準化係数同士の大小を比較することができる数値である。また，０から１までの値をとる，自由度調整済み決定係数（Adjust R^2）は，回帰式の当てはまりの良さ（独立変数が従属変数をどれだけ説明できているか）を表し，１に近いほど独立変数が従属変数をよく説明していると読み解くことができる。

参考引用文献

1　公益財団法人日本財団パラリンピックサポートセンター，「『ダイバーシティ＆インクルージョン』プログラム」，https://www.parasapo.or.jp/program/，（2021年５月29日）.

2　公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会，「ダイバーシティ＆インクルージョン（Ｄ＆Ｉ）」，https://olympics.com/tokyo-2020/ja/games/diversity-inclusion/，（2021年５月29日）.

3　藤田紀昭，2016，「障害者スポーツ，パラリンピックおよび障害者に対する意識に関する研究」，『同志社スポーツ健康科学』，８，1-13.

4　中村真博，2020，「パラスポーツが共生意識に及ぼす影響に関する一考察（１）：パラスポーツ体験に着目して」，『日本財団パラリンピックサポートセンターパラリンピック研究会紀要』，14，81-82.

5　藤田紀昭，2013，「（公財）日本体育協会スポーツ指導者資格所有者の障害者スポーツに対する意識に関する研究」，『同志社スポーツ健康科学』，５，9-21.

6　松尾哲矢，依田珠江，河西正博，和秀俊，2013，「車椅子運動が子どもにもたらす生理的・社会心理的効果に関する研究」，『笹川スポーツ研究』，２（１），222-229.

7　神田潤一，正野知基，2019，「障がい者とのスポーツ交流経験が障がい者および障がい者スポーツのイメージに与える影響：車椅子野球体験を通して」，『最新社会福祉研究』，４，69-76.

8　角田憲治，大石由起子，永瀬開，藤田久美，2018，「大学生における障害者スポーツの学習が肢体不自由者のイメージおよび障害者スポーツのイメージに与える影響：体験型授業と講義型授業の比較」，『山口県立大学学術情報』，11，51-58.

9　安井友康，2004，「車いすバスケットボールの交流体験が障害のイメージに与える影響」，『障害者スポーツ科学』，２（１），25-30.

10　吉岡尚美，内田匡輔，2007，「障害のある人と『障害者スポーツ』に対する体育学部学生の認識の変化に関する調査：『障害者スポーツ演習』の試みと効果」，『東海大学紀要体育学部』，37，21-27.

11　吉岡尚美，内田匡輔，2009，「体育学部生の障害のある人とスポーツに対する認識の変化につ

いて：第２報」,『東海大学紀要体育学部』，39，69-74.
12　大山祐太，2017,「大学の一般体育におけるアダプテッド・スポーツ実践の教育効果」,『北海道教育大学紀要（教育科学編）』，67（２），267-276.
13　本多敏明，2019,「パラスポーツ接触（する，観る，支える（育てる））の『入口』は何か：身近な障害者の存在の有無に着目した試行的分析」,『淑徳大学研究紀要（総合福祉学部・コミュニティ政策学部）』，53，103-120.
14　清水裕士，2016,「フリーの統計ソフト HAD：機能の紹介と統計学習・教育，研究実践における利用方法の提案」,『メディア・情報・コミュニケーション研究』，１，59-73.
15　藤田紀昭，2016，前掲書，11.
16　吉岡ほか，前掲書，74.
17　豊村和真，佐藤真衣子,「障害者に対する態度に関する横断的研究（１）」,『北星学園大学社会福祉学部北西論集』，45，77-87.
18　藤田紀昭，2016，前掲書，11.
19　藤田紀昭，2013，前掲書，15.
20　中山健二郎，2018,「パラリンピックと放送に関する研究について（２）：パラリンピック放送による『身体に対する一元的な価値意識の再生産』に関する一考察」,『日本財団パラリンピックサポートセンターパラリンピック研究会紀要』，10，65-83.
21　塩田琴美，2015,「障害者の接触経験と障がい者スポーツ参加意欲・態度との関係性」,『日本保健科学学会誌』，18（２），59-67.
22　山田潔，大野敏明，2018,「パラリンピック放送に対する身体障害者の声：ピョンチャンパラリンピックの放送に関する WEB 調査より」,『放送研究と調査』，68（11），58-82.
23　同上，69.

Study on Factors Influencing Awareness About Para Sports

NAKAMURA Masahiro

In the wake of the decision to host the Tokyo 2020 Paralympic Summer Games, various initiatives are being undertaken to promote awareness and behavior change through Para sports.

Previous studies on factors affecting awareness and attitudes towards Para sports in Japan has focused on gender, age, experience of Para sports, the type of experience, and experience of teaching people with disabilities, as well as comparing awareness before and after practicing Para sports. However, the relationship between these various factors has not been clarified, and it has been pointed out that it is necessary to examine the factors from multiple perspectives. Therefore, this study aims to clarify how basic attributes such as age and gender, as well as contact with people with disabilities and experience with Para sports, affect awareness towards Para sports.

In this study, we conducted a multiple regression analysis based on the results of an internet survey conducted in 2019, and used “basic attributes (age and gender)”, “contact with people with disabilities” and “experience with Para sports” as independent variables, and “awareness about Para sports” as the dependent variable.

The main results of the multiple regression analysis are as follows:

1. Men are more passive in their awareness about Para sports than women.
2. If a person has a disability themselves, they are slightly passive about Para sports.
3. If a person has a family member or friend/acquaintance with a disability, they are slightly positive about Para sports.
4. People with indirect experience of Para sports (e.g. watching Para sports on TV) are positive about Para sports.

5. People with direct experience of Para sports (e.g. watching Para sports at the stadium) are slightly positive about Para sports.

Of these, the most significant factor influencing positive awareness towards Para sports is indirect experience, such as watching games on television or the internet. These results suggest that experiences with Para sports have some effect on changing attitudes towards Para sports. On the other hand, the results also suggest that people with disabilities feel that there are still problems with the current state of Para sports.

Although the Covid-19 pandemic has forced the cancellation of spectators at the Tokyo Paralympic Games, the number of people watching the Games on television or the internet is expected to increase. It is hoped that this will lead to a change in views and attitudes towards people with disabilities, and to an increase in the number of people who are aware of the environment surrounding people with disabilities. This could develop into discussions about people with disabilities on a deeper level, and lead to social change.